

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 西塚俊太

本論文は、日本近代の代表的哲学者として知られる西田幾多郎と、その弟子である三木清の思想を比較することを通じて、各々の思想の特質を浮き彫りにし、特に、従来、西田のエピゴーネンとして位置付けられがちであった三木の思想の再評価を図ることを目的としている。これらを遂行するため、特に「個人」と「社会」という概念に注目し、それらが、両思想家の中でどのような意味を担われているかを解明し、それに基づいて、西田における課題が三木にどのように継承され、解決の道が模索されたのかを検討している。

第一章では、明治前期から中期にかけて、翻訳語として齎された言葉である「個人」と「社会」が新たな思想的課題として浮かび上がってくるという、本論文全体の背景となる思想史的状况が丁寧に説明される。第二、三章では、西田がこの問題に対してどのようなアプローチをとったのかが、西田の主要諸著作に対する解釈を通じて示される。そこでは、西田が、「永遠の今の自己限定」としての根源的な「自覚」、すなわち「真の自己」に立脚する立場から、「個人」と「社会」との区別を二次的なものとし、「個人」と「社会」とを連続的なものとして捉えていたことが指摘される。このように「個人」と「社会」とを「即」で結合する傾向の強い西田に対して、一世代後に登場した弟子、三木は、むしろ両者の非連続性を前提としてその思想を構築した。第四章では、三木が、両者の非連続性を所与の条件とした上で、アノニムかつアモルフな世界の断片的要素である「個人」が、自立性、主体性を保ちつつ、いかにして「社会」形成が可能であると考えたのかが、特に、三木の「構想力の論理」を軸に検討される。カントの「構想力」から着想を得たこの論理は、「個人」が「社会」から形成されるとともに、「社会」から相対的に自立して主体的に「社会」を形成するという営為を支える「論理」であり、具体的には、人間が自らの基礎経験（ロゴス＝イデオロギーを超える根源的体験）から、神話・宗教・習慣・制度・技術などを生み出す「かたち」形成の論理である。形成された「かたち」は、「個人」と「社会」を結合する一方、「個人」に対して桎梏と成り得るが、「我と汝」の出会いが開く地平によって、再活性化、再創造され、新たな「歴史」が刻み出されていくのである。

本論文は、これまでの研究蓄積を踏まえ、特に三木の思想的意義を、「個人」と「社会」を軸に、西田との比較から浮かび上がらせ、日本近代哲学研究に新たな視点を提供している。ただし、三木の思想的意義を強調するあまり西田哲学の捉え方にやや矮小化が見られる点、西田哲学と並んで三木の思想的基盤であったマルクス主義に対する検討が不十分な点、「構想力の論理」の重要な論点である「自然史」と「社会史」の統一に対する理解が一面的な点などは今後の課題である。しかし、全体としては、三木の思想的意義を独創的観点から説得力をもって論述している。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。